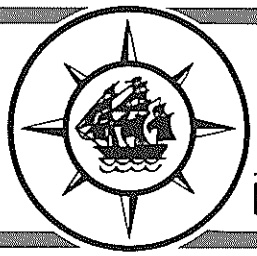
Operation Raleigh News



Operation Raleigh
DENSO

No.33

昭和62年(1987)7月10日(金)
毎月1回発行

●発行所　オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1−7−10 築地オーミビル502号
電話　東京(03)544−7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

日本一の富士山に登頂

ベンチャラーはみな満足顔

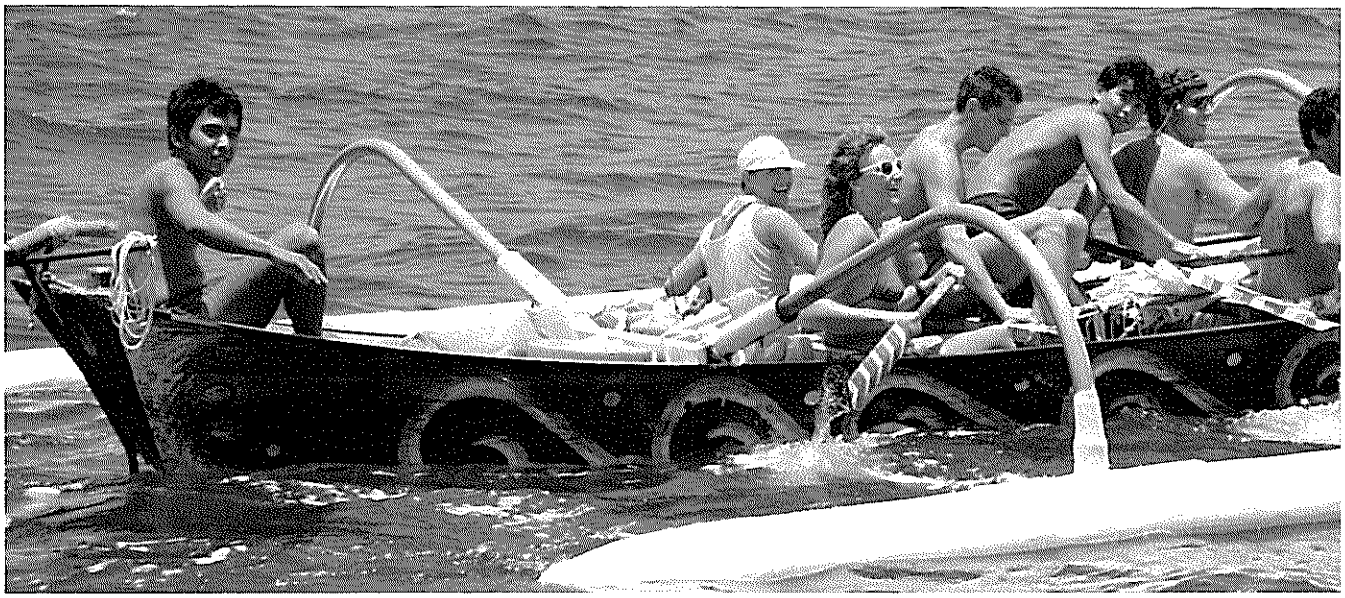
オペレーション・ローリー日本フェイズの締めくくりともいえる富士登山は6月30日㈫午後5時、麓の浅間神社で安全祈願をしたのち、全員元気に出発。山頂に近づくにつれ険しくなる登山道と薄くなる空気に息をはずませながらも、ほとんどのベンチャラーたちは午前5時前後までには山頂に立つことができました。残念ながらご来光は雲が厚くて見えませんでしたが、ベンチャラーたちは日本最高峰の富士山登頂に満足顔でした。

〈写真〉上 富士山頂で記念撮影
左 下山中のベンチャラー
右 浅間神社で安全祈願

サバニ冒険航海糸満（沖縄本島）へゴール

黒潮漕いで500キロ 天候も味方

幸運なカラ梅雨模様 6月の活動も順調に進む



▲ゴール間近! 余裕のベンチャラーたち

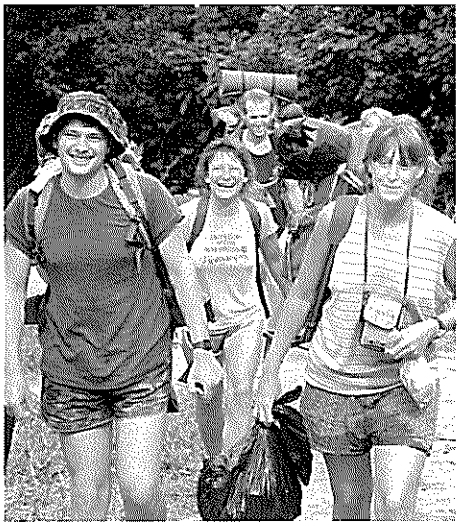
西表島での活動も快調
地元との交流深まる

沖縄プログラム

沖縄プログラムのサバニ組は6月12日午後4時30分、沖縄本島糸満の港へ無事ゴールした。西表島網取のベースキャンプを5月15日に出発してから29日で約500㎞を漕破したもので、糸満市民の大歓迎を受けた。なお、この壮挙を成し遂げたサバニ船カマドマ号は沖縄水産高校に寄贈された。一方、西表組はウミガメ調査、シャコ貝放流、オニヒトデ駆除などに参加、その後キャンプを撤収して、富士山へ向かった。

4月10日に西表島入りした沖縄班ベンチャラーたちも、この島に2ヵ月滞在したことになります。その間この秘境の島でイリオモテヤマネコ、ウミガメ調査、炭鉱調査、遺跡調査、オニヒトデ駆除、地元でのコミュニティー活動など数々の有意義なプロジェクトを消化してきました。5月15日に西表島を出発したサバニ船による冒険航海も順調にいっており、6月12日には沖縄本島糸満に入港する予定です。日本フェイズもいよいよ終盤を迎え、各々のベンチャラーたちも心は早や富士山へと気がはやっているようで、プロジェクトの合間には毎日のように「富士山」の唱歌を練習しています。かと思うと、残り少ない西表島滞在を惜しむかのように地元の人々との交流会、稲刈り、保育園でのペンキ塗りなど種々の奉仕活動に取り組んでいます。

最初何やら不思議そうに見ていた村の人々も、次第にベンチャラーたちと接する機会が多くなるにつれ、懸念の色はなくなっていきました。



▲新しいプロジェクトへ元気に出発

▲上陸するサバニ船のベンチャラー

▲手荒い祝福受けるウォルトン本部

むしろ今では道などで会うた
向こうから声を掛けてくれる
なっています。

ハーリー（サバニの競漕）
め、野球、ソフトボール、バ
ール、バスケットボールなど
ツ活動もふんだんに取り入れ
縄班ベンチャラーと西表島の
どんどん一体化しつつあり
とわずかな沖縄滞在ですが
ラーたちには存分に楽しい
出をつくってほしいものです
（6月11日／井田浩二＝沖縄プロ
ブリーダー）

全員で知床登山道の整備

羅臼岳・硫黄岳などに道標

▲道標背負い雪渓を行く

▲道標のボルト締め

▲道標の打ち込み

北海道プログラム

北海道プログラムは、知床半島縦走の際の地元山岳会の協力に対する感謝の意味を込めて、６月７日から10日まで、長い間整備されていなかった羅臼岳～硫黄山に通じる３ルートの登山道に方向、距離を示す50本の標識を、また６ヵ所に頂上を示す標識を立てる知床横断登山道整備のプロジェクトに取り組んだ。さらに14日の地元の山開きにも参加。その後、思い出深い羅臼町をあとに富士山へ向かった。

▲急な雪の斜面を登る

６月７日から４日間、知床横断登山道（ウトロ～硫黄山～羅臼岳）整備のプロジェクトに取り組みました。ベンチャラー10名は硫黄山側から、残りの者はベースキャンプのある羅臼岳側から入山しました。硫黄側のおもな仕事は硫黄山周辺の登山道の整備。羅臼側の仕事は、羅臼岳から硫黄山までの間の道標設置でした。２日めの朝は雨。やがて雨があがると一面の霧に包まれ、とても幻想的な景色になりましたがそのために硫黄山側では一時仕事を中断しなければなりませんでした。しかし夕方には燃えるような美しい夕日に、しばし仕事の疲れを忘れてみな見とれていました。９日には、２つのチームが硫黄山付近にて合流し、二つ池のキャンプ地に移動。すべてのベンチャラーがそろったところで小雨の降る中、夜遅くまでパーティが開かれました。翌10日全員そろってベースキャンプに帰還。途中羅臼平からの急斜面で数人のベンチャラーが滑落し、あわや大惨事という場面もありましたが、地元山岳会の方の活躍により全員無事に通過することができました。その後下山する時になってにわかに青空が広がり、数日ぶりに姿を見せた羅臼岳が暖かくベンチャラーを見送ってくれました。

（６月28日／堀内一秀＝北海道プログラム・サブリーダー）

「知床開き」に参加

大自然に別れを告げて町にやってきた僕たちを待っていたのは、雪に閉ざされた長い冬の終りと、山開きを祝う「知床開き」というお祭りでした。僕たちはステージのペインティングを手伝い、「1000人踊り」という盆踊り（外国人ベンチャラーは２

▲記念に建てたモニュメント

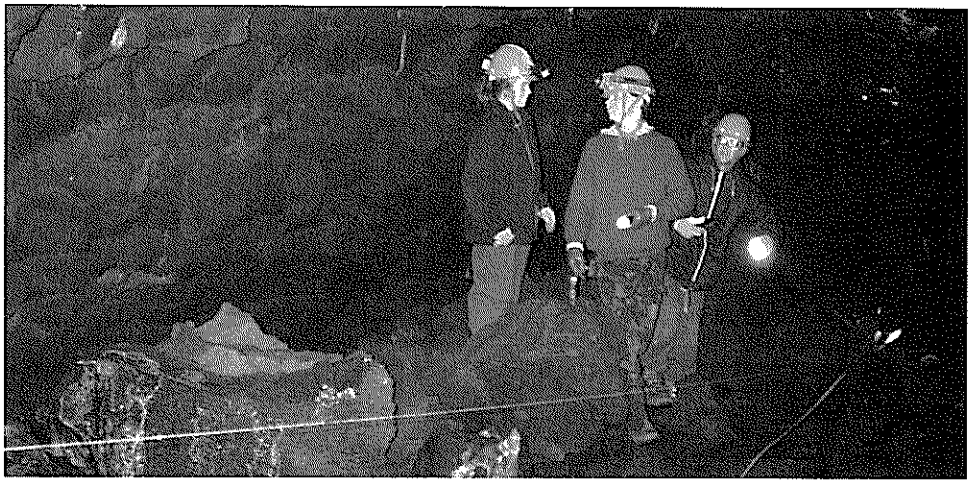
ステップ覚えるのに２日もかかりました）や綱引きに参加しました。また、約一週間練習した「知床伊吹き樽」の腕前も披露しました。さらにモニュメントの落成式や、お別れパーティーなども開かれ、ベンチャラーたちは町の人々との別れを惜しんでいました。

（６月28日／桃井和馬＝北海道プログラム・サブリーダー）

富士山麓で科学調査

風穴探険、樹海探険、巣箱掛けなど

本州Ａグループ、Ｂグループは５月中旬から６月上旬にかけて、東海自然歩道を一日平均30㎞のペースで歩き、富士山麓をめざした。途中静岡県清沢などで温かい歓迎を受け、国際交流を重ねながらの旅だった。６月３日にはＡグループ、６日にはＢグループが富士山麓山の家に到着し、富士山プロジェクトのベースキャンプとなる山の家を大改装した。６月８日以後は、ムササビ生態学習、青木ヶ原洞窟探検、本栖湖畔でのコノハズク用巣箱掛けなどのプロジェクトを実施した。青木ヶ原では最近発見された火口列の実測調査などに協力した。



▲氷も残っている青木ヶ原樹海の洞窟調査

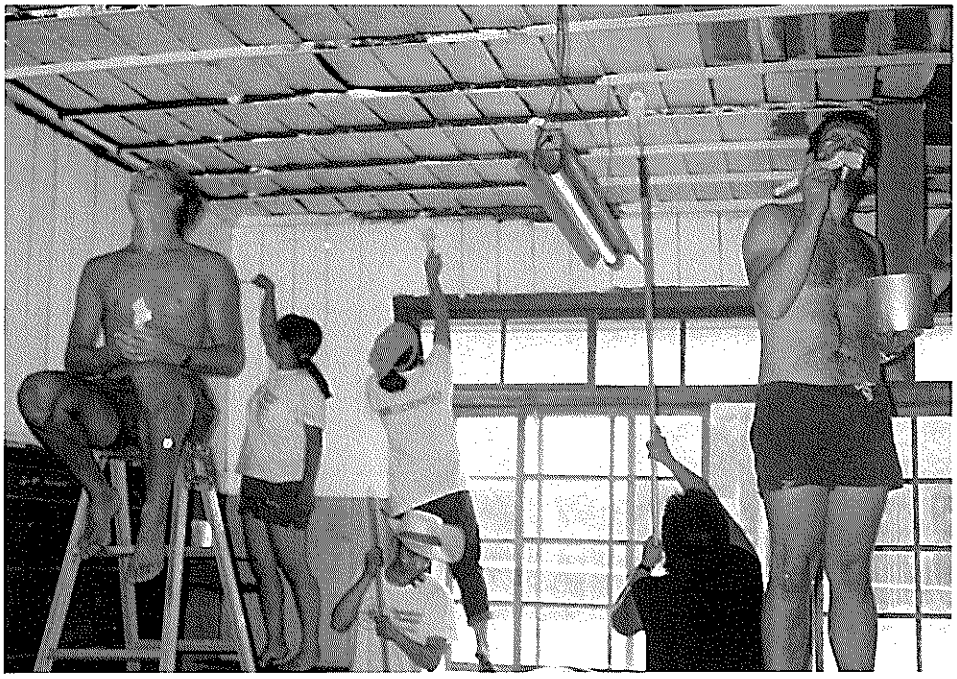
本州プログラム

富士山麓の朝霧高原で夢のような毎日を過ごしています。８時に起きぶらぶら散歩したり、しゃべったり夜はパーティーです。いま、自分のなかで何かひとつのことが終ったと感じます。思えば、毎日が嵐のようだった木曽川いかだ下り。１日が50時間もあるように感じました。ベンチャラーがプロジェクトに疑問を持ち始め、ボク自身、プロデューサーとベンチャラーとの間に立って四苦八苦しました。１ヵ月弱の足助滞在で少し余裕がもどりましたが、自分の役割が十分つかみ切れぬまま終ってしまったようにも思います。しかし、東海自然歩道を歩きながら出会った多くの人々に対して、いまはどのように感謝していいかわからないほどありがたく思っています。そして、いかに多くの人々がこのプロジェクトに賛同し、協力してくださったかを身にしみて感じています。

すべての歩行を終え、富士山麓の山の家に着いたとき、まるで自分の家に帰り着いたようなやすらぎを覚えました。全員で古い小学校の朽ちかけた壁にペンキを塗り、障子を貼りかえ、雑巾がけをしました。山の家は見違えるようにきれいになりました。下見に来られたボーイスカウトの世話人の方も大変喜んでくださいました。またいつかこの家に戻って、みんなで塗った壁をながめてみたいものです。

富士山麓での科学調査は、むしろ科学的・冒険ツアーといった感じでした。欲をいえば、ベンチャラーたちの自主性、創造性を生かす形でのプロジェクトにできればよかったと思いました。

（６月28日／藤本圭太＝本州プログラムＡグループ・サブリーダー）



▲みんなで協力して山の家を大改装（富士山麓ふもと山の家）

▲藁科中学校でフォークダンス

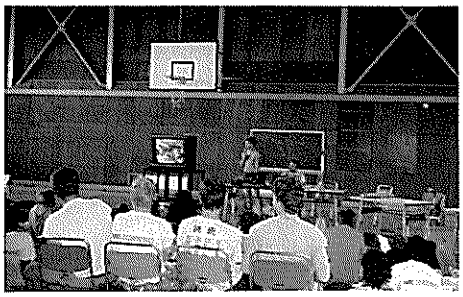
▲神楽もとび出した清沢での交流会

日本フェイズ TOPICS

富士山麓で活動成果を報告

北海道・本州・沖縄の各地でさまざまな活動を展開してきたベンチャラー116名は、プログラムごとの活動を終了し、日本フェイズの最後のまとめである合同プログラムに向けて、本州・北海道組が6月21日に、沖縄組が23日に、それぞれ富士山麓・朝霧野外活動センターへ到着しました。青木ヶ原樹海清掃、活動センター内の登山道の整備などの奉仕活動の後、28、29日の2日にわたって開かれた全体報告会では、北海道、本州A・B、沖縄、サバニの各グループごとに、各地の活動内容を報告。

ベンチャラー（とくに外国人）たちは自分が参加した以外のフェイズの発表風景や4台のモニターに写し出されるテレビフォトやビデオをさかんにカメラにおさめていました。また29日には、ORJC実行委員でフリーライターの伊藤幸司さんが、各地の活動のさまざまなエピソードを紹介する新聞記事をまじえて「日本フェイズの活動が日本人にとってどんな意味を持ったか」というテーマで講演。またエディターの木幡和枝さんからは、日本の文化（風習・宗教など）について、その歴史的・文化的背景を含めた解説がなされ、外国人ベンチャラーは興味深く聞きいっていました。そして最後にトニー・ウォルトン日本フェイズ運営本部長から、総評と関係者に対するねぎらいの言葉があり、ベンチャラーからも暖かい拍手が贈られました。その夜は、ニュージーランドのベンチャラーが中心になって午後から準備した豚の丸焼きをメインディッシュに、盛大なフェアウェルパーティが開かれ、日本フェイズの成功とそこで生まれた友情を祝して、夜遅くまでベンチャラーたちの歓談が続きました。一夜明けた翌30日午後には、富士登山に向けて全員元気に朝霧を出発しました。



▲全体報告会（朝霧野外活動センター）

有楽町マリオンで記念フォーラム

オペレーション・ローリー日本フェイズ記念国際フォーラムが7月3日東京有楽町マリオン朝日スクエアで開催。講師には永井委員長、祖父江委員、矢野委員をはじめ、中沢新一氏、大儀見薫氏を迎え木幡和枝さんの司会進行で外国人ベンチャラーの日本での異文化体験、国際交流、自然体験をテーマに討論がなされました。（詳細は次号）

▲フォーラムでの本州メンバーたち

ゼブ号インド洋航海組出発前アンケート

オーストラリアのダーウィンから東アフリカのセイシェル諸島までのゼブ号航海に参加するため、6月25日午前11時発のガルーダ・インドネシア機で成田を出発した森田昌之君と渡辺靖彦君に出発前アンケートをお願いしました。

森田君

渡辺君

――OR応募の動機は?

森田　教壇に立っていて知らないことが多すぎることを実感。世界の教育事情を考えていくうえでの布石になればよいと考えて応募しました。

渡辺　一度日本から自分を切り離して、自分の文化的なアイデンティティーを探ってみたかったからです。

――出発に当っての不安は?

森田　語学と船酔いです。

渡辺　不安はありますが、現実にトラブルに直面して、解決に乗り出すまでとっておきます。

――家族、友人の反応は?

森田　応援してくれています。私の友人は社会人なので、自分たちにできないことを私がやってくるという点で大きな期待がかかっています。

渡辺　健康面の心配はあるようですが、積極的に賛成してくれました。

――参加するに当っての抱負は?

森田　自分に足りない点をどんどん吸収してきたいと思っています。

渡辺　海の男になってきます。

――これまでにした準備は?

森田　語学、カメラ機材、海洋性鳥類学、進化論。

渡辺　ジョイニング・インストラクション（英国本部からの指示書）を中心にゼブに乗った戸島さんのアドバイスに沿って準備しました。

――やり残した準備は?

森田　語学や帆船に関する知識。

渡辺　南天の星座を完全に覚えきれなかったことです。

――現地で何を主眼にしますか?

森田　日本では見られない鳥などの生物を観察したい。また国際感覚を養いたい。

渡辺　とにかくゼブ号を壊さないようにセイシェルにつくことです。

――帰国後の予定は?

森田　職場に復帰します。

渡辺　大学の試験が私を待っています。

――これから出発する人へのメッセージは?

森田　自分が求めるものを徹底的に追求してほしいと思います。

渡辺　装備を新しく購入する人は、帰国した人のアドバイスを受けたほうがよいと思います。

日本代表派遣青年のページ

豪ビクトリアフェイズ 帰国後アンケート 毎日が楽しく新鮮

カヌー、岩ワラビー調査、ダイビングなど

（小型カンガルー）

オーストラリアから帰国した砂子由美さん、岸美佐さん、高田義隆君、田子真也君が帰国後アンケートに答えてくれました。

――苦労したことは？

砂子　最初のうちはブリティッシュイングリッシュに面食らいました。

岸　道なき道を、暑さや寒さと戦いつつ重い荷物を背負って何日も歩いたこと。

高田　英国人独特の言いまわしや性格。

田子　食事。缶詰はもうコリゴリ。

――楽しかったことは？

砂子・岸　いま思えば楽しかったことばかりです。

高田　毎日が新鮮で楽しいことがたくさんありました。

田子　ダイビングで日本では見られないさまざまな生物に出会ったこと。

――一番印象的だったことは？

砂子　スノーウィ川を180kmカヌーで下ったこと。

▲カヌーで川下りする砂子さん

岸　たった４人で岩ワラビーの調査の帰り、２日半道に迷ったこと。悪天候、仲間の負傷などのアクシデントが重なり、極限まで追いつめられた感があったが、助け合って、この危機を乗り越えることができました。このとき最も感動したことは負傷した仲間が常に他人への思いやりの心を忘れなかったことです。本当の強さとはこういうものだと思いました。

高田　アボリジニー（原住民）のひとりが帰るとき涙を見せたので、こちらも辛かったです。

――一番有意義だったプロジェクトは？

岸　ウィルソンズ岬でのダイビングです。海洋生物学を学び、岬全周を調査するため、12日間船で生活しました。

高田　教会の改修作業。

田子　セイルトレーニング。共同作業の重要性を学ぶよい機会でした。

▲本格的なセイルトレーニングに挑戦

――事前にマスターしておけばよかったことは？

砂子　手軽に実演して見せられる日本の伝統芸です。

高田　ダイビングのライセンス取得や比較文化の本なども読んでおくとよいと思います。

田子　英会話も大切ですが、話す内容を蓄えることの方がもっと重要だと思いました。

――いま、最もやりたいことは？

砂子　見聞してきたいろいろなことを整理し、じっくり考えてみようと思っています。

岸　今回知り合った友人と再会すること。そのときを楽しみに自分を磨くこと。

高田　大学での勉強もしたいのですが、またブッシュのなかに入りたいと思っています。

▲カンガルーと遊ぶ高田君

▲車椅子の青年も参加

――日本電装に対する反応は？

砂子　なんて気前のいいスポンサーなんだ、と目を丸くしていました。

岸　みんなにうらやましがられました。ＤＥＮＳＯのマークを見つけるたびに騒ぎが起きたほどです。

高田　オーストラリアのドライバーはほとんどＤＥＮＳＯの名前を知っていました。僕らの行動が日本電装の企業活動や日本と海外との草の根コミュニケーションに役に立てば幸いだと思います。僕たち日本人ベンチャラーは、とくに日本電装にお世話になって感謝しなければならないと思っています。

帆船ゼブ ダーウィン着

帆船ゼブ号で大阪から東京経由でオーストラリアのダーウィンをめざしていた飯塚敏晃君から事務局宛にハガキが届きました。

われらが帆船ゼブは６月15日無事ダーウィンに到着しました。東京を出てからは太平洋好（？）気圧のお蔭で信じられないほど快適なセイリングが続き、大阪→東京間の海の荒れがウソのように穏やかで、これはまさに神のなせるわざか？なんて思ったりしました。来る日も来る日も晴天で、陽が海から昇り、また沈む……。見えるものは海と空！ほんとに海のはじのほうは滝になって落ちていくように思えるんですよ。そして夕陽の美しいこと。陽が西に沈むとき、北の空も美しく数色に染まっていくなんて……信じられない！

なお、飯塚君は同じくゼブ号で航海した山本久仁子さんとともに７月12日、ガルーダ・インドネシア航空機で成田に帰ってくる予定です。

一方、ゼブ号はダーウィンから東アフリカのセーシェル諸島に向けて航海を続けますが、このフェイズには日本から森田昌之君、渡辺靖彦君が参加します。